

関西学院大学審査
博士学位論文

芥川龍之介文芸研究

―芥川文芸における「闘い」をめぐって―

関西学院大学文学研究科
文学言語学専攻 奥田雅則

「敗北」や「狂気」といった拭い難く付き纏う負のイメージにおいて語られてきた芥川龍之介という作家とその作品を、「闘う人」としての側面からいま一度捉え直すことによって、新たな芥川文芸への視点を拓くことが、本論文の目的である。そのために、晩年の作品群に至る過程においての、文芸史的転換の有り様を明らかにし（第一部）、また晩年において、自身の救われるべき可能性の模索ということにおいて、彼の「闘い」の根幹をなすものであるキリスト教への接近の過程をたどり（第二部）、そのうえで彼の「闘い」の姿を示すものとしての作品の読解を試みる（第三部）。

「第一部」

芥川文芸において大正十一年以降という時期は、一つの転換点として見做し得る。それは、ひとつには『六の宮の姫君』（大正十一年八月）を最後にして芥川が常套とした王朝ものを擲つという点において、ひとつには王朝ものの終焉に呼応するかのように、自身を素材とした堀川保吉を主人公とする保吉ものの作品群が、この時期から新たな手法として登場してくるという点において認められる。ここには同時代的意味合いにおいての現代小説への移行を目論んだ芥川の意図が潜んでおり、第一部では、これらの作品では一貫して、芥川文芸の転換の方向性を成すものとしての人間凝視の態度が模索されているということを論じ、そのような観点から、この時期の芥川文芸を、人間凝視の態度の確立のための自己凝視の営為であったと結論した。

「第二部」

最晩年の芥川龍之介を「闘う人」として捉えようとするとき、それは滅びゆく自分自身を徹底して見詰めているながらも、そこに何かしらの救済を見出そうとした試みにおいて認められようが、その救済として彼が最も深く

目を向けたものがキリスト教であった。『神神の微笑』において、真の意味でのキリスト教との対峙を始めた芥川は、『おぎん』、『おしの』とキリスト教を扱った小説を書いてゆくが、ここで一貫して見据えられたものは、東洋的背景を有する日本という土地におけるキリスト教信仰の存在の可能性であり、また、近代という彼が生きた時代におけるキリスト教信仰の在るべき姿であった。芥川はこの時期は「基督教的信仰或は基督教徒を嘲る為に屢短編やアフロリズムを舐した」だと言ったが、それはキリスト教を深く眼差し、また真の意味における信仰の獲得の困難さを見ていたからこそでもあった。第二部では、芥川がキリスト教に対峙し始め、その眼を深化させてゆく過程として、この時期の切支丹ものを位置付けた。

「第三部」

ここでは、昭和二年という芥川が死を選ぶ年に書かれた作品から「闘う人」としての芥川龍之介の姿を見出す。晩年の芥川の「闘い」とは、芥川を脅かしたものの前へと立たされたこれらの小説の人物たちの姿から、ひいては滅びゆく自分自身への徹底的な自己凝視のなかから、彼が救われる可能性を、たとえ僅かであってもそれを小説に書き留めることによって、確かに存在する救いの道とその在り処を確認しようとするという営為において認められるであろう。ここで扱った作品は、全てそのような痛ましい格闘の記録であり、ここに最期のときまで小説家としての「闘い」を続けた芥川龍之介を認めることができるのである。